



「解説」と「意見」

【気儘爺さん斜視独言】

田中庸彦(昭和51年卒)

20歳を過ぎたころから緩やかに確実に壊れゆく脳細胞が、加速的に壊れ始めたと感じたのは50代も後半になった頃でしょうか。それとともに、自分が頑固おやじになっていくのを自覚していました。一方、脳での情報処理が単純になってきた分、それまで気づかなかったことが、目の前に鮮やかに見えてくることがあります。私の場合それに加えて、幸か不幸か、日本語を聞いていても英語だと思って聞いていることがあるので、その日本語を操っている日本人が何を言わんとしているのか、全く分からないことがしばしばあります。その因は、「Yes」、「No」を最初に言わないことと述語が文末にくる日本語の特殊性の為に、辛抱強く最後まで聞かなければならないことによります。それどころか、意見を述べようとしている本人自身が、意識的なのか無意識なのか、結論に辿り着かない場合もあります。このような言い方が、外国人(欧米人と中国人)に比べてはるかに多いのです。このあいまいさは、書かれた文章にも常に存在します。例えば、新聞記事の「・・・『自分では書いていない。女性事務員ではないか』事務員は『よく分からない』・・・」。この場合、theに相当する定冠詞がないので、二人の事務員が同一人かは不明と感ずるのです。

日本語の特殊性ではなく、日本人の特殊な心根が原因となって意味不明の会話になっていることもしばしばあります(言語と性格に連関性があるという論はさて置く)。それは、「解説」しているだけなのに「意見」を述べていると、本人が勘違いをしている場合が多いのです。例えば、粽(ちまき)の由来を間違った中国語先生に、その場で間違いを指摘したら怒られた、と説明していたら、相手(日本人)が、「中国人はメンツがあるんです」と答えてきました。これは、「だから・・・だ」という結論が抜けているので、「意見」ではなく単なる「解説」なのです。「だからそのようなことは中国人に対して言わない方がよい」、または、「ここは日本だから貴方は正しい」が抜けています。他に例はいくらでもあります。ビンラディンを逮捕して法の裁きを受けさせるべきだったのに、殺害したのはアメリカの横暴と述べていたら、「アメリカは世界の警察」と解説してき

ました。だから許されるとか許されないとかは決して言わないのです。賛成なのか反対なのか、現代日本人は自分の立場を表明しない技を自然に身に付けてしまっているのです。誤解を恐れずに述べると、個人を(アメリカ追従の)政府に置き換えても同じです。一方、英国女王が中国主席は礼を知らないと批判したとき、中国があなた達こそ中国5千年の歴史を学べと言い返したのは、驚きはしましたが、大変うらやましくありました。この技の裏技として、「誰々が言っている」と第三者を引き込んで自分の責任を逃れる言い方があります。嫁さんがこんなふうに言っている、と言った弁護士を私は即座に解任したことがあります。この言い方は、日本人に良くあり、外国人には極めて少ない。

時に、自分が壊れかかっているのを忘れた脳細胞が筋骨隆々となって蘇ってることがあります。その時、我々は自分の国を自分で守ることを忘れてしまった「魂を失った日本人のなれの果て」と認識することが、自らの言動を理解する鍵になるのではないかという思いが、頭をもたげてくるのです。

(おわり)



松ヶ崎の山の宝ヶ池側の倒木に寄生したおびただしい茸

1959年卒 中谷 博

工業所有権協力センター、英語名では Industrial Property Cooperation Center という財団法人のことをご存知の方は少ないと思いますので、この機関の概略を紹介したいと思います。IPCC と聞くと、通常は気候変動に関する政府間パネルのことと思われる方が多いと思いますが、われわれ科学技術に携わる者として、特許審査関連の仕事をするもう一つの IPCC は非常に重要な役割を果たしていると考えています。

この機関が設立されたのは1985年で、昨年30周年を迎え、式典が行われました。私は、1990年の3月から、三菱電機から最初は出向のかたちで IPCC に参加することになり、その後11年間、特許審査関連の仕事に携わってきました。実は、昨年12月には IPCC 親睦会のOB会の会合が催され、久しぶりに旧知の仲間と会う機会がありました。

IPCC の組織概要と人員について

大きく分けて事務部門と調査業務センターのもとに 先行技術調査業務を行う機械A部門（9グループ）、機械B部門（10グループ）、化学部門（10グループ）、電気部門（10グループ）で構成されています。各部門のグループは特許庁の審査室と1対1で対応する構成になっています。

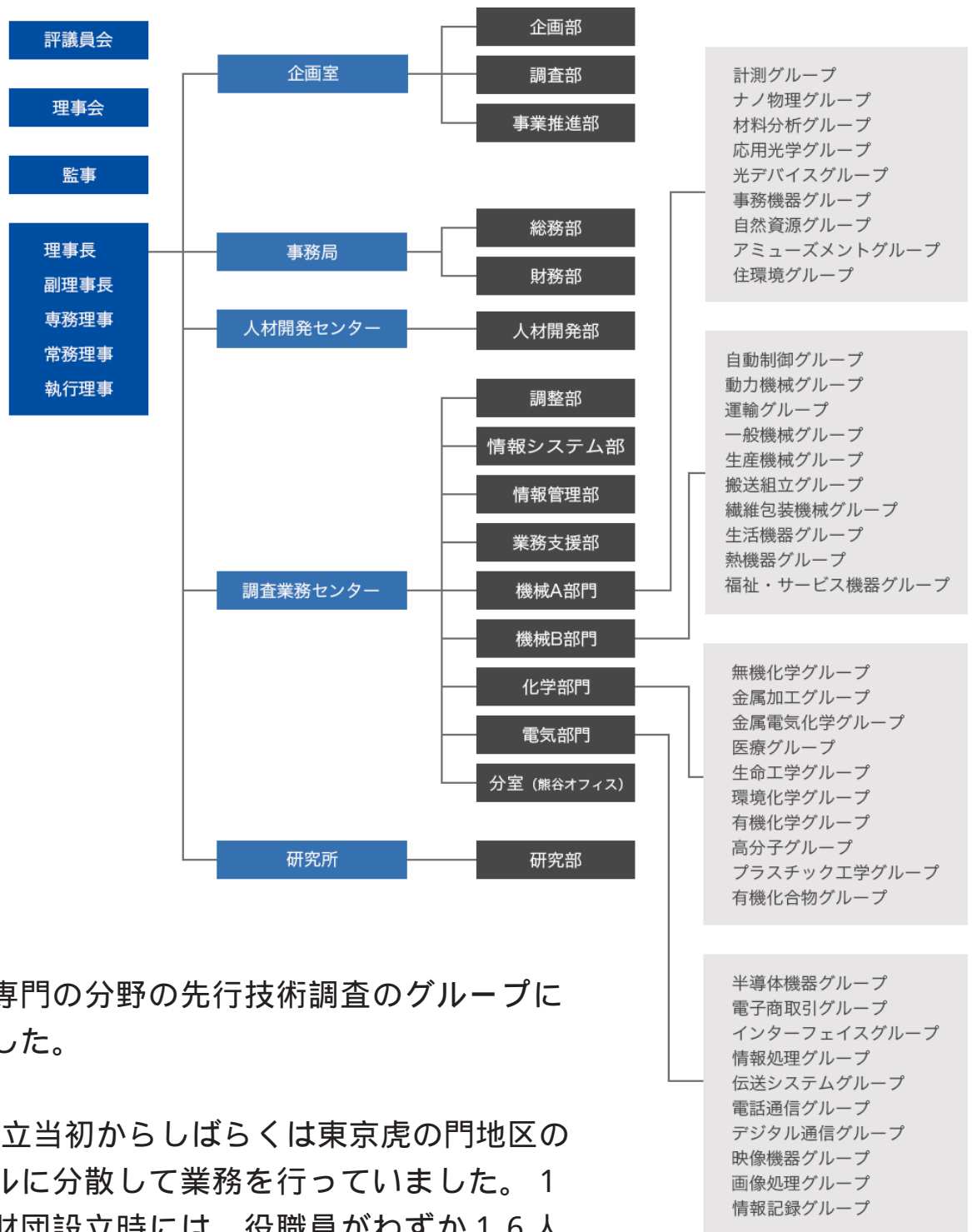
われわれ企業からの出向者の大部分は、特許審査関連の部門の各グループ

に所属することになります。企業からの出向者は初期の数年間、主として主任研究員という名称がつけられていましたが、平成3年頃からは主席部員という名称に変わりました。出向元の企業は、機械、化学、電気など、大手のあらゆる業種の製造業が網羅されています。各部門には、特許庁から来た部門長がいて、各グループには、特許庁審査長OBや現役の審査長経験者がグループ主幹として、業務を統括します。現在の組織全体の構成を添付の資料に示します。

添付の組織は、私が在籍した中頃から変わっていませんが、平成2年と平成3年には上記の他に「Fターム」を開発するための、開発グループがありました。平成4年には、初期の役目が終わったとして、解散することになり、約30人いた



深川ギャザリア ウエスト3棟

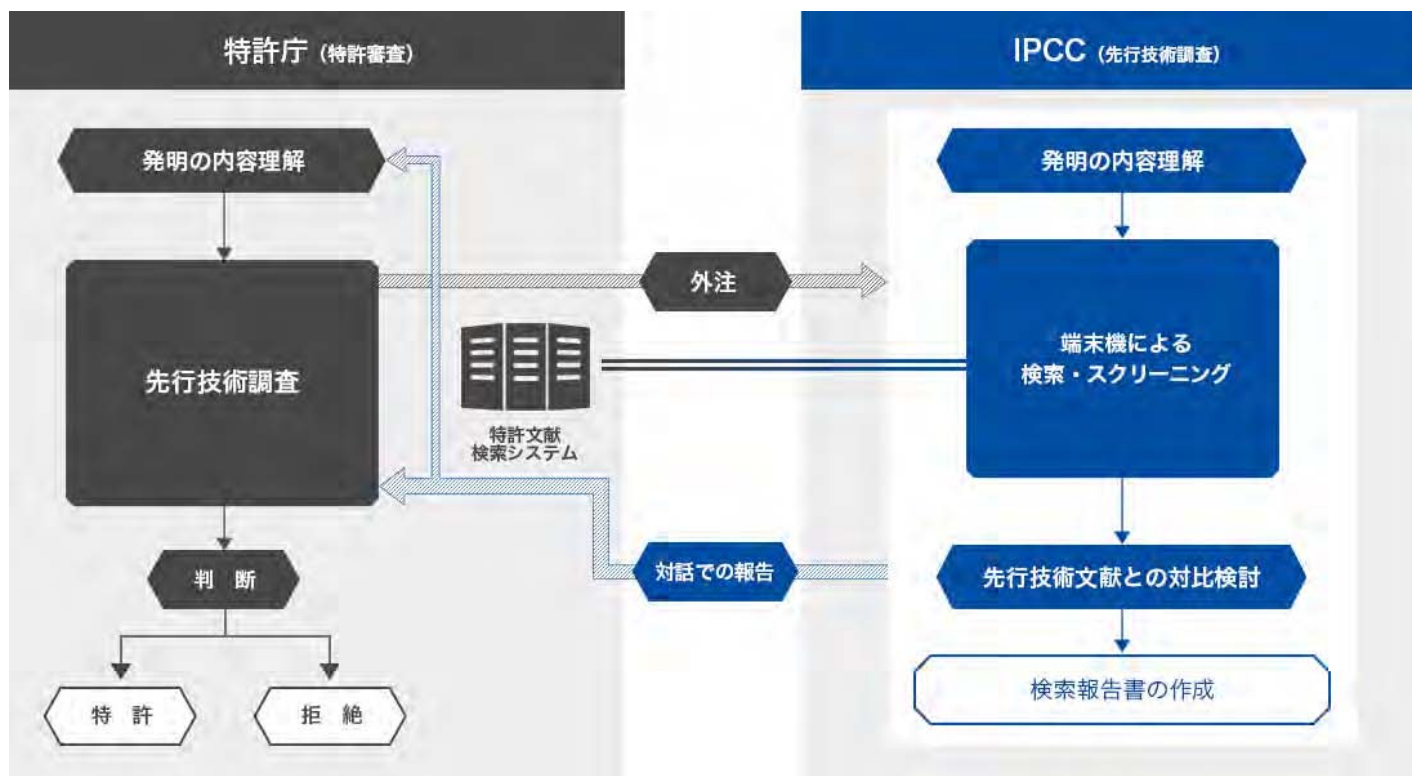


人達は各々専門の分野の先行技術調査のグループに吸収されました。

IPCC の設立当初からしばらくは東京虎の門地区の 4 か所のビルに分散して業務を行っていました。1985 年の財団設立時には、役職員がわずか 16 人で業務を開始したとのことでした。設立時から 5 年後の私が入所した当時でも、職員はわずか 150 人程度でしたがその後、IPCC の存在が認知されるに従い次第に増え始め、現在では 1700 人を超える財団法人としては、非常に大きい機関に成長しています。職員数が増加するに従い、平成 3 年には錦糸町の東京トラフィックビルに移り、その後平成 13 年には霞ヶ関ビルと虎の門三井ビル、現在は江東区木場の深川ギャザリアのウエスト 3 棟に拠点を移しています。他に、分室が埼玉県熊谷にあります。

IPCC 業務の概要

現在の業務の中心は、先行技術調査と特許文献の分類付与ですが、私が入所した当時は F ターム開発という、先行技術調査に有効なツールの開発がかなりのウ



エイトを占めていました。実は、私が IPCC に出向したのは、IPCC から三菱電機本社に昇降機関係の F ターム開発の要請があったからでした。

F ターム開発について

F タームというのは、特許庁が膨大な先行技術調査を迅速に行うのに有効な手段として開発したもので、世界に先駆けて用いているツールです。特許文献の中に出てくる特徴のある述語を抽出して、マトリックス状に配列して、特許文献のキーになる技術内容を浮かび上がらせるための有効な手段と考えられます。そのために、開発するテーマの分野の特許文献を数百件読んで、有効な述語を抽出して、マトリックス状のリストを作成することになります。さらに各述語（ターム）についての解説を図解した説明資料をつけたマニュアルを作成することで F ターム開発の作業は完了します。

私が入所した平成 2 年当時は、多くの特許文献から適切な述語（ターム）を抽出して技術の根幹をなす述語とそれに従属する述語を枝分かれさせた「ツリー」と称するターム配列を作成するのが第 1 段階でした。第 2 段階は、この「ツリー」を元にしてマトリックス状のリストを作成することになります。リストの作成と並行して、抽出した技術用語「ターム」の解説をつけるマニュアル作りの作業を行うことになります。私の場合、最初の年の 4 テーマはエレベーターやコンペヤーなどの昇降機に関する F ターム開発が仕事でしたので、技術内容は十分理解でき、問題は無かったのですが、2 年目のテーマは油圧技術に関する「液圧モーター」、「油圧回路」、「風車」の 3 テーマが与えられたので、参考書を買ってきて一生懸命勉強して、なんとか無事に開発を完了させることができました。F ター

△開発は、定期的に担当の審査官と打ち合わせをしながら行う必要があるので、1テーマについて4、5回特許庁へ出向いて2時間程度打ち合わせることになります。特許庁の多くの審査官と面談していると、審査官は我々民間の技術者と明らかな違いがあることが分かりました。彼らは技術者というより科学技術に関する法律家の側面が強く、技術内容よりも特許文献の中の文章の表現の仕方に拘りがあるように見受けられました。

Fタームを開発するグループは、IPCC発足当時に役員室が設けられていた神谷町の愛宕神社近くにあるスピリットビルの2階で、私より1か月前に入所した15人の人達が、既に関係業務にあたっていました。一方、一か月遅く入所した私と日立製作所から来た人は、特許法を含む特許業務に関する研修を開発業務と並行して受ける必要があり、特に忙しい日々を送ることになりました。

Fターム開発グループでは、毎日リーダー格の人からFタームに関するレクチャーがあり、開発作業を進める中での疑問点など、たがいに意見交換をして、徐々に開発作業のスキルを高めていくことができたと思います。なにしろ、開発グループのほぼ全員が、全く初めての経験でしたから、暗中模索の状態がしばらく続きました。Fターム開発には、特許庁に納入するまでに、いろいろな手順があり、実際に役に立つツールになるか、検討会が実施されます。開発途中のマトリックス状のリストとマニュアルを使って、仮付与という作業を本テーマの担当でない別の2人が行います。仮付与というのは、先行技術文献の中の特徴的な述語(ターム)をピックアップしてリストの中の該当する十数項目以上にチェックを入れることで、技術文献のキーになる技術を浮かび上がらせるようにします。仮付与した結果を検討会の資料に加えて、リストとマニュアルの有効性を審議します。審議結果を反映させて、有用なリストとマニュアルを完成させることとなります。検討会后、特許庁でさらに担当審査官と検討を重ね、最終的にリストとマニュアルを完成させて特許庁へ納入することとなります。特許庁への納入をもって開発グループの仕事は完了します。

Fターム付与とキーパーソンという職務について

Fターム付与という仕事は、IPCCの外部の民間企業に勤めている技術者あるいはOBの技術者から「Fターム付与」業務を希望する人を募集してテストを実施し、Fターム付与をする人が決められていました。Fターム付与を実施する必要がある先行技術の特許、実用新案の件数は数百万件に上る膨大なもので、全国で非常に多くの人がこの仕事に携わっていました。Fタームを付与する人が決まると、講習会を実施することになり、毎回霞ヶ関ビルに近いビルの部屋で行われていました。

IPCC では、各テーマについて担当する「キーパーソン」という職務があって、1人の主席部員が数件のテーマを受け持って、定期的にFチーム付与されたリストがIPCCに返却されたときチェックを行うと共に、付与する人からの質問に答える役割をはたしていました。こうして膨大な先行技術文献にFチームが付与されて、コンピューター処理され、先行技術文献検索のためのデータとして保存されています。

先行技術調査について

先行技術調査のためのコンピューターを用いた検索がIPCCの最も重要な仕事ですが、平成元年がIPCCの先行技術調査の最初で、初年度の調査件数は1万件です。平成

2年からは、指定調査機関となり、その後処理件数は増え続け、平成6年には年間10万件に達しています。平成20年には年間20万件を超えています。平成元年から平成27年まで総合計351万件を達成しています。特許庁とIPCCとの関係を下記します。

当初は書面納品による報告書のみでしたが、平成10年以降、審査官に対面で直接報告する「対話型」が入り、現在は「対話型」が主流になっているようです。Fチームを活用して先行技術検索を行うには、マトリックス状に配列されたリストを構成するマス目に対応する英数字記号を互いに掛け合わせた論理式を作成することによって、コンピューター画面に類似性の高い先行技術文献を表示させることが可能になります。もちろん、分類記号とマス目の英数字との掛け合わせも含まれます。現在は、主席部員が自席で、各人専用のコンピューターを用いて、先行技術の検索作業を行っていますが、初期の頃は「サーチルーム」という検索専用の部屋の中で、それも各テーマ専用の光ディスクに内蔵のデータから検索作

テーマ名 エスカレーターの形式及び構成部材

年 期 コース テーマコード 3F321

F/キー	00	AA	00	01	AA	01	02	AA	02	03	AA	03	04	AA	04	
B66B 21/00 ~23/26	AA		特定目的 *		・標付注		・保守又は点検注		・意匠注		・安全性					
					11 AA 11		12 AA 12		13 AA 13							
B66B 21/00~21/12 21/12~21/10 21/10~21/18 21/18~21/26	BA		特定種類 *		・可変速形 (中間速形)		・開け/駆動形 (移動、停止の繰り返し)		・各階段が上下に一段分往復運動するもの		・乗降り形 (速度の異なる移送面への)					
					11 BA 11		12 BA 12		13 BA 13		14 BA 14					
B66B 21/00~21/12 21/12~21/10 21/10~21/18 21/18~21/26	CA		駆動装置 *		・駆動機を設置する箇所		・制御機械室		・移送面及駆動部の肉樹		・中間部					
					11 CA 11		12 CA 12		13 CA 13		14 CA 14					
					21 CA 21		22 CA 22				24 CA 24					
					31 CA 31		32 CA 32		33 CA 33		34 CA 34					
					41 CA 41		42 CA 42		43 CA 43		44 CA 44					

注: *印のある欄又はFチームに付与する場合はフリーワードを抽出すること。

F-チームリストの一部

業を行っていました。現在の、審査官との対話型の場合は、特許庁内の端末機を操作して、検索を行うことが多くなっているようです。

出願特許文献の分類付与と公開前の特許のFターム付与

出願された特許や実用新案に分類付与を行うことは全て特許庁が行っていたのが平成6年からIPCCでも行うことになり、同時に公開前の特許、実用新案にもFタームを付与することになりました。分類は、全ての作業の基本になる非常に大切な仕事です。分類付与の大別けの作業は特許庁でやり、その下の中分類以下をIPCCがやり、後に特許庁で、審査官がチェックすることになります。チェックの結果はIPCCにフィードバックされます。

IPCCの同好会活動について

IPCCの同好会は「愛宕会」という名称がつけられています。これは財団設立当時、愛宕神社の近くのスピリットビルで仕事を開始したからだと思われます。財団設立の半年後の昭和61年8月に「愛宕会」が発足しました。財団で働く職員相互の親睦をはかるためですが、その後次第に増え続け、平成27年には34の同好会が活動していて非常に活発のようです。

IPCCでは普通の民間企業と異なり、グループ内の他の人と互いに協力して仕事を進めることは非常に少なく、各個人が独立して仕事をするのが基本です。したがって、職員相互の親睦をはかることはとりわけ大切で、そのことが同好会活動を活発にしていると考えられます。初代理事長の戸井一喜氏は、職員相互の親睦に心を配っておられました。同好会の中には、かなり早くから活動していたのが、囲碁の会、健歩会、テニス同好会理事長自身が主導する俳句の会、スキー同好会、野球部、男声合唱団、愛宕スピリットバンド、写真同好会、コントラクトブリッジ同好会などで、初期の頃は特に複数の同好会に参加している人が非常に多かったと思います。野球やコントラクトブリッジは、特許庁との対抗試合が行われていました。コントラクトブリッジ同好会では、2、3回霞ヶ関ビルの霞会館で特許庁との対抗試をやった記憶があります。職員の数が増えるにしたがって、同好会に全く入らない人も増えていったようです。

愛宕会行事の中で、非常に大きい行事が秋に行われる団体旅行です。職員の数が増えるにしたがって、準備も大変で、毎年、JTBまたは近畿日本ツーリストを幹事会社にして、旅行計画をたてる訳ですが、私も一度、常任幹事になったことがあり準備と、当日の役割をこなすのがかなり大変でした。東北地方の秋保温泉、芦ノ牧温泉、上山温泉、関東地方の鬼怒川温泉、草津温泉、水上温泉、中部地方の上山田温泉、熱海温泉、伊東温泉などです。私は、平成2年の水上温泉か

ら平成12年の鬼怒川温泉まで全て参加しましたが、中部地方から東北の主な温泉を巡ることが出来て、非常に楽しい経験をすることができました。

愛宕会の行事で毎年10月頃に行われるのが、ソフトボール大会です。平成3年、第一回大会が、神奈川県石川島播磨重工のグラウンドを借りて行われました。2回目以降は、玉川の河川敷や江東区の猿江恩師公園で行われました。IPCCの中の各部門対抗でトーナメント方式で行われます。私も、毎年参加することになって、結局、平成12年まで10回、機械B部門のピッチャーとして参加して、プレーを楽しみました。

IPCCの現状について

私が在籍していた頃から仕事の内容で変化しているのは、平成21年から公益財団法人から一般財団法人に移行したことです。実質大きく変わったわけではありません。平成26年から「外国文献検索」が本格的に開始され、また平成27年から「公開前出願」の先行技術調査を本格開始したことなどです。私が在籍していた頃は、特許庁からの先行技術調査に関する外注は、IPCCが独占していたと思いますが、現在は一部他の調査機関にも外注しているとのこと。外注の90パーセント程度はIPCCが受注しているようです。

第2、第3の職場としてのIPCCについて

IPCCで勤務して、11年過ごしましたが、第2、第3の職場としてはかなり良いのではないかと思います。特に、各個人の独立性が高く、まわりに気を遣う必要が少ないこと。マイペースで仕事を効率的に進めれば、休暇を取って2週間程度の海外旅行でも可能で実際、私が在職中でも随分多くの方が海外旅行をしていました。ただ決して仕事自体が決して楽ではないことに注意が必要です。給料の点については、基本給がボーナスと合わせても600万円程度で、決して高くはありませんが、通勤手当や家賃補助、遠方からの単身赴任者には単身赴任手当も支給されるので、まずまずの額ではないでしょうか。さらに、勤務年限が、特に問題なく仕事をこなすことが出来れば、最長73歳までとなっていることは、大きいメリットだと思います。

(おわり)

朝永正三先生にとっての工部大学校と東京大学の合併と，その後

(その 2)

藤尾博重 (精密工学教室元教官)

(3) 工部大学校と東京大学の合併に際して

(3-1) 合併に際しての学生側の動き

さて，明治 19 年の東京大学と工部大学校の合併については東大百年史 通史一につぎのような記述がある．

「併合という段になっての最大の問題は、工部大学校の学生や卒業生がそれを承知しなかったことである。明治 19 年（1886）1 月になると、工部大学校学生運動が活発化する。学生等は行動において大集会を開き、本格的な運動の開始を決議し、」云々（東京大学百年史 通史 1 P.938）が、冒頭の(1)に挙げたことである．

工部大学校が東京大学に併合される動きに対して，工部大学校の生徒がどのようにふるまったかの資料は少ないが，冒頭（1）の「為に校内に一大恐惶を惹き起せり、一日講堂に學生一同大集会を開き、反対運動を為すことに衆議一決し」云々に引き続き，文部大臣に建議するための草案作りに，菅原恒覧は任じられ，その起草者となった．しかし，菅原恒覧は事の重大さに鑑み，工部大学校と関係の深い山尾庸三工学寮長，大鳥圭介の二人を訪ね，その意見を聞き，次いで元老院議官山口尚芳，渡辺洪基（後の帝国大学初代総長）の協力を得た．さらに，文豪の福澤諭吉，大新聞を有する福地源一郎の声援を依頼．それへの反応は，「総理大臣に伊藤氏あり、文部大臣に森氏あり、両氏の意見相投合して廟議一決せるもの貴公等如何なる名説ありとも到底之を動かす能はざるは觀易きの理なり。若し慰安の一助とて建議せんとせば其の行文は穩和ならざるべからず」，「現時の状態より考察して廟議を動かさんとせば外字新聞を利用するの外なし君等の教師たりしプリンクレーは横浜にて外字新聞を發刊して居れば相談しては如何若し建議の擧に出でんとせば斯々の主旨に出でざるべからず」との注意を受け，さらに語を継いで，「压制政府の常として其の政策を行はんが為め苟くも反対に出づるものは之を遇する酷逆を極む。君等總代たるものは犠牲に供せらるるの覺悟なかるべからず」との説諭を受けたと記している．

これらの諸先輩の注意を受けて，建議書には慎重には慎重さを加え，文部大臣に建議書を提出したと云う（菅原恒覧 旧工部大史附 P.120）．以下にその内容を抜粋して付した．

「余等数名其の数名其の總代に選挙せられたり。先ず文部大臣に建議する事とな

り、余は其の起草者に任せられしが事頗る重大なるを以て本校と密接の関係ある山尾庸三、大島圭介の両氏を訪ひ其の意見を叩き次に元老院議員山口尚芳、渡辺洪基の二氏に協かり尚ほ時の文豪にて大新聞を有する福澤、福地両先生の勢援を請ひたり。然る所福地先生曰く、『総理大臣に伊藤氏あり、文部大臣に森氏あり、両氏の意見相投合して廟議一決せるもの貴公等如何なる名説ありとも到底之を動かす能はざるは觀易きの理なり。若し慰安の一助とて建議せんとせば其の行文は穩和ならざるべからず』と注意せられたり。福地先生は曰く、『現時の状態より考察して廟議を動かさんとせば外字新聞を利用するの外なし君等の教師たりしプリンクレーは横浜にて外字新聞を發刊して居れば相談しては如何若し建議の擧に出でんとせば斯々の主旨に出でざるべからず』とて口授せられたり。而して尚語を継かれて曰く、『压制政府の常として其の政策を行はんが為め苟くも反対に出づるものは之を遇する酷逆を極む。君等総代たるものは犠牲に供せらるるの覺悟なかるべからず』と懇諭せられたり。」

(3-2) 合併反対論

東京大学と工部大学校との合併としても、工部大学校側の一部とはいえ外国人教師の中には反対の意志を示して辞職する者もあり、また、学生（当時工部大学校側では生徒と呼んでいた）の強く反対した理由は何であろうか、それを裏づける理由は次のようなことが挙げられよう。

(3-2-1) 工部大学校の評価と、東京大学との教育目的の違い

さきに示した菅原恒覧の草した文部大臣あての建議書には、工部大学校について次のような評価を記している。「我邦人ノミナラス諸外國人モ我國理學ノ進歩シテ工業振興シ著シキコトヲ見聞シテ嘖々稱賛措カズ爲メニ官立工部大學校ノ名夙ニ歐米各國ニ流布シテ苟クモ理學ニ意ヲ注ク者其名稱ヲ知ラサル者ナキ迄ニ立ち至リ外國貴顯紳士渡來ノ折八首トシテ我工部大學校ヲ訪ハレ校舍構造ノ宜キヲ得校則組織ノ整頓セルヲ見テ稱賛スル毎ニ私共本校設立ノ御趣旨ノ然ラシムル所感戴スルト同時ニ外人ノ理學工業ニ熱心ナルヲ感服仕居候斯ク内外國人共ニ本校ニ望ヲ屬シ本校ヲ以テ日本工業ノ中心トモ致候以上八官立工部大學校ノ盛衰ハ殆ント我國理學工業盛衰ノ權衡トモ相成ル程ニ有之候ト奉存候」と（P.122～）。

上記の文章を要約すれば、次によるようになろう。我が国のみならず諸外国人も我が国の工業振興が著しいと評価しており、官立工部大学校の名ははやくから外国に知れわたっていた。いやしくも理学に関心を持つ者は其の名を知らぬ者はない。外国の高位の紳士が来邦のとき工部大学校を訪れ大学校の教室・設備が整っていること、校則・組織・制度を称賛するたびに、本校が設立の趣旨に適っていることを実感するとともに、日本が工業化に熱心なのに感服している。このように内

外を問わず、本校に望みを託し、本校によって日本の工業の中心ともなり、本校の盛衰が我が国の工業化に直接的に影響するものであると、工部大学校の存在の大きさを自負している。

また、この建議書では、つづいて、次のように記している。「工部大学校ノ教育法タル理論ト実業トヲ兼ネ教ヘ其ノ理學ハ後來実業ノ基礎トナリ企業心ノ原動力トモナリ寧口実業ニ篤キモ理論ニ走ラス確固不拔工業擴張ニ熱心ナル活?有為ノ工業者ヲ養成スルノ御趣旨に可有之然レバ本校生徒タル者既に其業ヲ卒ヘ諸工場に入り奮ッテ之カ主任ニ當リ大ニカヲ有用ノ工業ニ盡ス者全国殆ンドこれレアサル所ナキ」と。

上記の内容は今様に表現すると、工部大学校の教育法は、理論と実業を一体として教える。その理論は実業の基礎であって企業の原点である。工部大学校では、実業に傾注することにより、理論に偏ることなく工業を拡張することに力点を置くような有意の工業技術者を養成するのが本校の教育目標であって、本校を卒業した者は全国各地で奮闘していると、建議書の初めの格調高くうたっている。

一方、「東京大學うち理學部ヲ置カレ候ハ専ラ學術ノ眞理ヲ考究シ歐米人未タ曾テ發見セサルノ眞理ヲモ彰揚シ、我邦人工學者ハ申スニ及ハス歐米工業社会ノ面目ヲ一新セントノ御趣旨ニシテ寧口実業に疎キモ理論ノ考究ヲ怠ハス理學ノ研究ヲ第一ノ眼目ト被致候義ト奉恐察候」と。続いて、「東京大學工部大学校は同ク大學ノ名稱を有スルモ其精神ノ存スルトコロ組織ノアルトコロニ至りては全ク相同シカラス、ニツノ者有之候テ後初テ理學ノ研究ト工業ノ盛大ヲ期スヘク工部大学校廃止の不可ナル猶ほ東京大學理學部廃止の不可ナルト同様ニシテ毫モ異ナルコト無之候事ト奉存候」として、合併反対を訴えた。

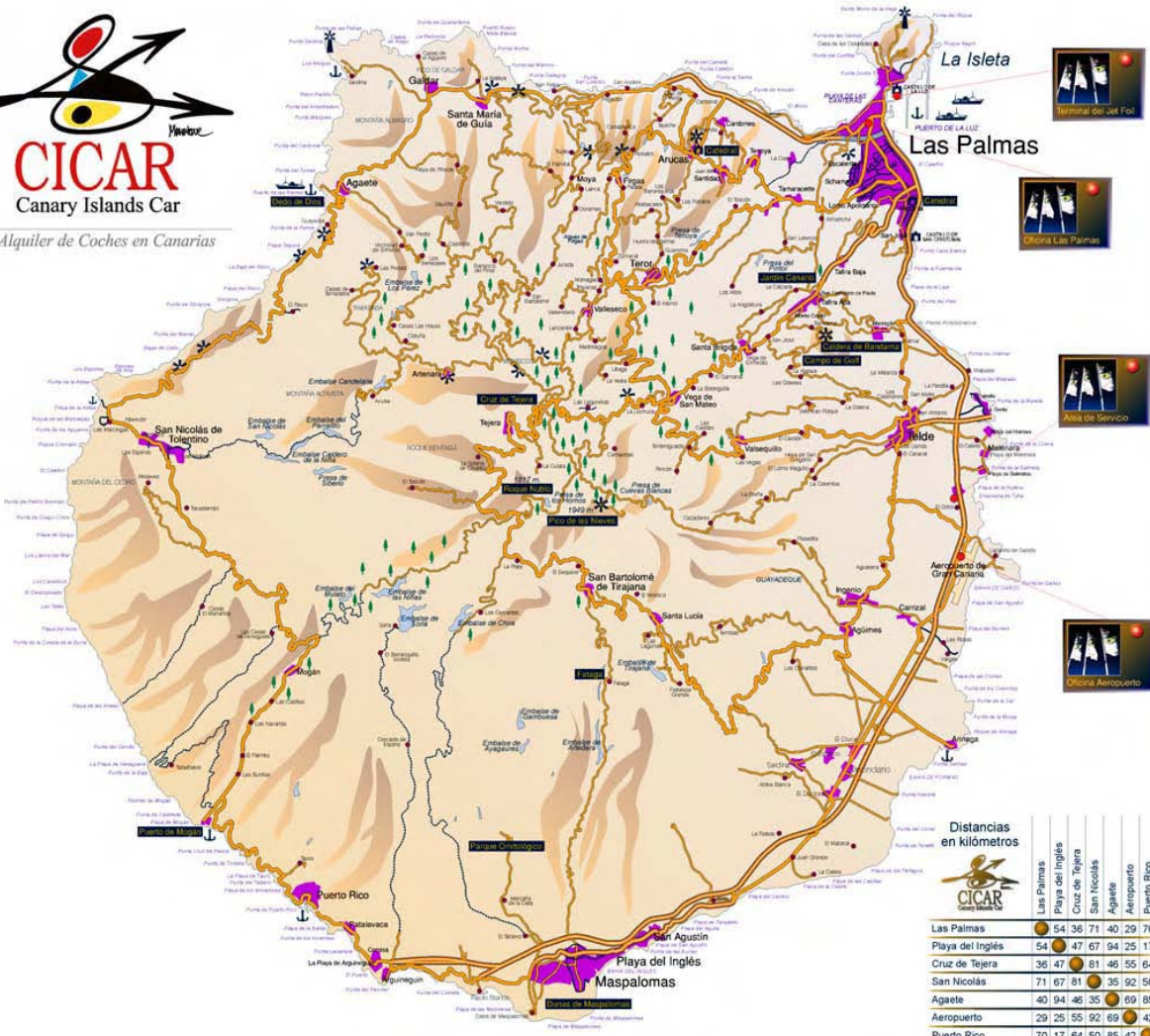
(つづく)

カナリア諸島 (Canary)

檜原 勇多賀 (S37卒)

カナリヤ諸島は、アフリカ北西部の西方大西洋中に点在する諸島で、スペイン本国の一部をなす。中央に位置する大きな島をグラン・カナリヤ島という。島は直径50キロメートルの円形状で、その円周上1時30分の位置に人口23万の都市ラス・パルマスがある。

ハプニングは、ここラス・パルマスから始まった。その日、仕事を終わってホテル・レイナ・イサベルの部屋に帰ると、一通のメッセージが待っていた。
 『明朝チェックアウトしてください。 ホテル支配人』
 「これは一体どういうことですか？」
 まず、キャッシャーの窓口で聞いてみた。
 「私では判りません。フロントで聞いてみてください」
 言われた通り、フロントで同じことを聞いてみる。



Gran Canaria

「あなたがチェックインなさったとき、滞在期間を申告されなかったの、明日から他の予約が入ってしまったのです」

「しかし、そのとき、滞在期間を聞かなかったのはあなたではないですか」

「当ホテルでは、申告が無い場合は自動的に1週間と登録されるシステムになっております」

「マネージャーと話したい」

マネージャーの答えも同じであった。

「誠に申し訳ありませんが、もう予約が入っていて、取り消すわけにはいかないのです」

調べてみると、同宿の仲間5人全員に同様のメッセージが届いていた。どうやら、観光旅行の団体客の申し込みがあって、これを受け入れるために必要なだけの空室をつくり出さねばならず、われわれを追い出しにかかったらしい。

「ヨーシ、出てやろうじゃねエか」

全員頭に来ていたので、すぐ、出てやることに決まった。しかし、出てやると決めたものの、秋の観光シーズンのまただ中なので、5人分の空き部屋は見つからない。やっと見つけ出したのは、ラス・パルマスから50キロメートルも離れた、同島の南端、ちょうど6時の位置にあるマスパロームスという町のホテル・タマリンドスであった。やしの木の街(ラス・パルマス)から、つばめのうじゃうじゃいる町(マス・パロームス)への大移動である。

「これはタマランドス」

と駄洒落を言いながらも、荷物をまとめて、車で移動することにした。

時は1982年10月、ヒナマール発電所へ出張でやって来たときのことである。

カナリヤ諸島は、鳥のカナリヤを産するところ有名である。しかし、カナリヤから連想するような美しい島ではない。島の大部分は、石ころと砂の半砂漠状態である。これには訳がある。世界地図を見ればすぐ判ることだが、アフリカ北部からアラビア半島にかけて、北緯10度と北緯30



度の間に帯状の砂漠地帯がある。この砂漠地帯の成因として、次のような説がある。大昔、水惑星が地球に衝突した。しかし、その衝突の角度が小さかったため、水惑星は地球の表面を擦るように衝突した。とはいえ、衝突のエネルギーは凄まじく、衝突と同時に、水が砂に変わったと言うのだ。そのようにして出来たのが、アラビア半島の砂漠とサハラ砂漠である。そして、カナリヤ諸島は、この帯の中に入っているのだ。このように考えれば、



カナリヤ諸島が石ころと砂の半砂漠状態である訳がよく理解できる。

途中、やしの木と緑の芝生に覆われたいくつかの部落がオアシスのように現れては消えていったが、その他は石ころと砂の単調な景色が続く。

マスパローマスのホテル・タマリンドスに着いたときは、もう正午を過ぎていた。近くにヌーディスト・ビーチがあるということを知り出し、早速行ってみることにした。

島にはプラヤと呼ばれるビーチがたくさんあるが、われわれが目指すのはプラヤ・デ・マスパローマスである。ヌーディスト・ビーチまで行くためには、幅1キロメートルはある砂漠を横切らなければならない。また、ヌーディスト・ビーチには不文律があって、裸にならねばならない。そこで、砂漠の手前で車を乗り捨て、上半身裸、下半身は短パン姿になり、はだしで砂漠に入って行った。



ところが、予期しない大変なことが、われわれを待ち構えていた。日陰になっている北斜面を登るときはよいのだが、太陽が照りつけている南斜面を下るときは、まるで、灼けた鉄板の上を歩くように熱いのだ。みんな、転がるようにして北斜面にたどりつき、ひりひりする足をしばらく冷やす。このような砂の山が延々と続いているのだ。

死ぬ思いをしてやっとビーチにたどり着くと、いるわいるわ、真っ裸の老若男女が、砂の上に寝そべったり、波打ち際に沿ってあてもなく、ただ、ぞろぞろと歩いている。初めのうちわれわれは、波打ち際の砂の上に腰を下ろして目の前を行き来する人の群れを眺めていたが、そのうち服をまとっているのがかえって気恥ずかしくなって、おもいきって素っ裸になって海に飛び込んだ。ひと泳ぎし

て、また、砂の上に腰を下ろして休んでいた。ポケットからライターを取り出し、タバコに火を着けようとしたが、海から吹き付ける風に邪魔されてなかなか着かない。そのとき、前を歩いていた裸の女性がサッと寄って来て、目の前にしゃがんで風を遮る格好をしてくれた。

「どうも・・・」

と言いながらライターを擦るが、気ばかり焦って、一向に火は着かない。彼女は暫くそのままの姿勢をとってくれていたが、ついに諦めて、会釈して立ち去った。

楽の後には苦あり。楽しい思いをした後には、地獄が待っている。帰りの砂漠越えは、まさに地獄であった。往きはまだよかった。南斜面を転がり降りればよかったのだから。ところが、帰りは南斜面をよじ登らなければならない。いくらきつくても、途中で立ち止まることは許されない。とにかく、いっきに駆け登らなくてはならないのだ。やっとの思いで砂漠を通り抜けたときは、みんなヘトヘトであった。

苦の後には楽あり。その晩は、楽しい食事が待っていた。

ホテルでひと休みした後、仲間5人揃って、ラ・ストラダというシーフード・レストランに食事に出掛けた。店に入ると、すぐ通路の右側にカウンターがあって、その日に捕れたいろいろな海産物が並べられている。ジャンボ・ロブスター、ガンバスと呼ばれるエビ、名前の判らない大きな貝や魚。どれも新鮮な魚介類である。その中から好きなものを選んで、調理法を指定できる。われわれは、ジャンボ・ロブスターの生き造りを注文することにした。早速コック長を呼んで、

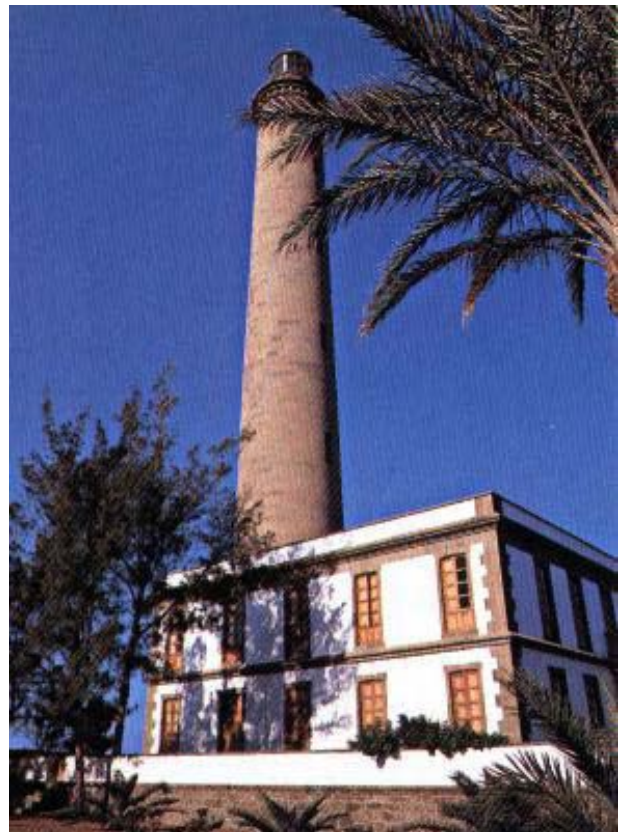
「このロブスターをまっぴたつにして、そのまま持って来てほしい」

たどたどしいスペイン語に手ぶり身ぶりを交えて説明した。

「・・・」

コック長は、はじめ納得の行かない顔をしていたが、やっとうなづいて、一番大きいロブスターを抱えて調理場に消えた。

待つことしばし。くだんのコック長が、大きな皿を恭しく捧げ持って現れた。その後ろから、白い上っ張りに白い帽子をかむったコック達がぞろぞろ付いて来ている。コック長が大きな皿をわれわれのテーブルの中央に置くと、若いコック達がテーブルを囲んで、



われわれの後ろに立った。変な東洋人達が、なまのロブスターをどうやって食べるのか、見物してやろうと言う訳だ。大きな皿の上には、見事に、まっぴたつに切られたロブスターが載っている。われわれの仲間の一人が、いつも携帯している醤油の瓶をおもむろに取り出して、ひとり一人の取り皿に注ぐ。コック達は、身を乗り出して、固唾を飲んでこれを眺めている。

さあ、いよいよ今夜の宴の始まりだ。白く透き通った身を口に運ぶ。うまい！舌の上でトロツと溶けて、甘い味が口の中に拡がる。コック達はと見ると、目を丸くして覗き込んだり、何か互いにひそひそ話し合っていたが、そのうち満足したのか、コック長を先頭に、来たときと同じく一列になって、調理場の方に帰って行った。

先程から、となりのテーブルからわれわれの方を窺っている女性がいた。連れの男と話している言葉はドイツ語であった。

「今晚は。あなた方はドイツからいらしたのですか？」

「ええ、そうです」

「ご夫婦ですか？」

「いや、ここに来て知り合ったのです」

答えたのは、男の方だった。

「いかがです。食べてみませんか？美味しいですよ」

その女性は、差し出された皿からロブスターのさしみをフォークにとって、おそるおそる口に運んだ。その後の彼女の何とも言えぬ表情にみんな笑い、そして、改めてワインで乾杯した。



(第二話 おわり)

昭和48年入学 同窓会報告

2016年9月10日(土)に京都大学桂キャンパスで学年同窓会を行い、28名が集まりました。3年前に移転したばかりの機械系の新しい校舎 整然とした講義室・実験室・研究員室 見学の後、工学本部の大窓から京都盆地 京都タワー・大文字・北山 を一望。カフェ・アルテで、懐かしい写真とトークの連発。2年後に次回開催予定です。 (文責 北村隆行)



—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

また、原稿が切れてきました。京機短信存続が問題になるレベルです。

是非とも投稿、お願い致します。 気楽に !!

但し、原稿のタイトルの次に、著者名と卒業年次を必ず記入してください。その記入のない投稿がかなりあり、編集者の仕事を増やしていますので、何とぞご配慮の程、お願い申し上げます。

【要領】

宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。 宜しくお願い致します。

奥島研ミニ同窓会報告

2016年9月8日(木)18時から京セラドーム大阪ビスタールームにて、奥島研ミニ同窓会を開催しました。

2009年3月、吉村允孝先生の退官祝いに1972～74年奥島研在籍者の有志が集まりました。その後、定期的に集まりを持とうということになり、2年後の2011年9月から京セラドーム大阪でミニ同窓会を開催することにしました。吉村先生を中心に、毎年少しずつ参加者が変わりながらも今回で6回目の開催。遠路九州からの参加者に敬意を表し毎回リーグ戦終盤のソフトバンク戦に設定。ここ数年は消化試合。若かりし頃に想いをはせ、ギターを持ち込み試合そっちのけのフォークソングの大合唱で盛りあがっていました。

今年は、ソフトバンクが日本ハムと僅差の首位攻防戦。各自の近況報告の後はしっかり試合を観戦しました。結果はおおかたの予想に反しオリックスの逆転勝ち、ペナントレースは面白くなりました。

来年からは幹事を交代、趣向を変え京都で開催する予定です。6年間の参加者を記しておきます。(卒業年 氏名 :6回参加、 :5回参加)

(68年)吉村允孝 (69年)竹村正(2012年ご逝去)

(72年)阪上雅昭 弘中勝正 成瀬忠史

(73年)河本秀一 北村隆 下尾茂敏 土井公明 中島宣隆
山本晴久

(74年)浦川和夫 小池明士 (75年)山本譲

(幹事 下尾茂敏)

